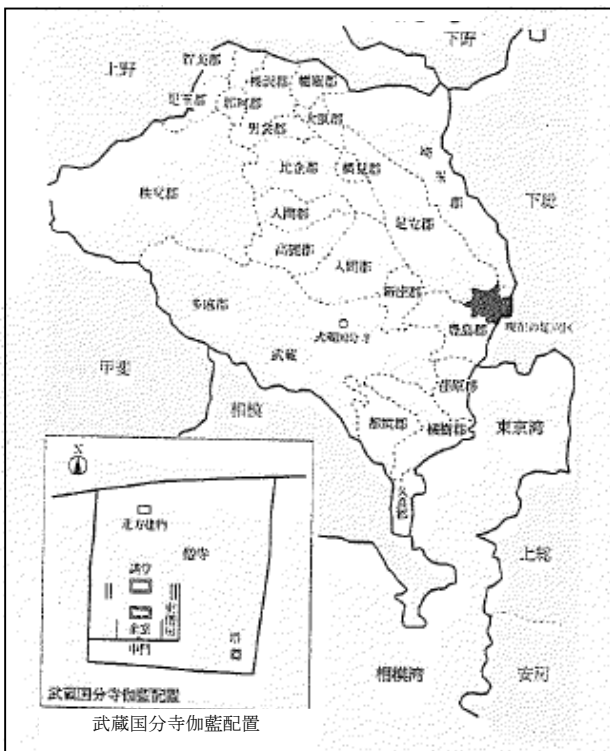


●足立区の沿革

中世(江戸時代まで)

◆飛鳥・奈良時代

「足立」という地名が記録に残されているのは、735年(天平7年)が最初で、平城京二条大路から発見された木簡に「武蔵国足立郡」とその名が記されており、「足立」という地名は奈良時代に起源がある古い地名です。奈良時代の「足立郡」は現在の「足立区」よりもかなり広い地域でした。



武蔵の国と国分寺

◆鎌倉時代

源頼朝の奥州平定後、江戸重長が奥州地方の防備のために隅田川のほとりに関所を設け、このあたり一帯が「関屋の里」といわれています。本来、「関屋の里」は中世の交通集落である隅田宿の別名でしたが、隅田宿の役割が千住宿に移ると、両宿の間の地域が「関屋の里」と呼ばれるようになりました。

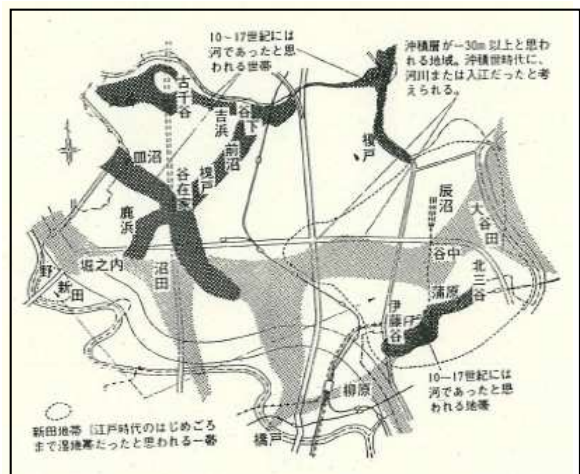
◆安土桃山時代、江戸時代

豊臣秀吉の小田原攻めにより、1590年に後北条氏が滅びると、関東6カ国は徳川家康が支配するようになり、1591年に千住村で検地が行われ、1597年には千住宿が宿駅に指定されました。この間、1594年には、関東郡代伊奈忠次により、隅田川(当時は荒川とよばれていた)に千住大橋がかけられています。この大橋によって奥州街道筋が本区を縦貫するよう固定され、千住宿を中心とするその後の足立の変遷が形作られていきます。3代将軍家光の時代になると、千住が日光街道の初の宿場となり、日光東照宮参詣や参勤交代の大名行列でにぎわいました。

千住市場、俗にいう「やっちゃ場」は天正年間(1573-1591)に始められ、千住大橋がかけられると、野菜・川魚の荷扱いが増え1720年頃には神田・駒込の市場と共に江戸の三市場となり、幕府のご用市場となりました。



千住の店舗と住居



古い時代の復元と地名の関係

## ●足立区の沿革

道路は江戸時代になって急速に発達し、江戸以北と江戸をつなぐ街道はほとんどが千住を経由するようになりました。区内には旧日光街道、水戸街道、下妻街道、赤山街道、鳩谷街道の5街道が通り、ほかに大師道、阿弥陀道、熊谷堤道がありました。また、当時の貨物輸送は舟便が主役で、特に荒川を利用して江戸、川越間を往復する川越舟はその花形でした

### <新田開発>

江戸幕府の治水政策の浸透により農耕地の開拓が進み、未開地であった足立区東部の地で佐野新田に代表されるような新田開発が始められると、徐々に定住者が増えていきました。新田は1596～1703年の間に17か所が開発されました。江戸中期以降は水田に加え、せり、ねぎなどの野菜、菊などの花の栽培が盛んになりました。

## 近代(明治・大正時代)

### ◆明治時代

1868(明治元)年に江戸が東京と改められると、旧府外の代官であった桑山効が武蔵知県事に任命され、1869(明治2)年に小菅県が設置されました。現在の足立区は小菅県の管轄区域内にありました。

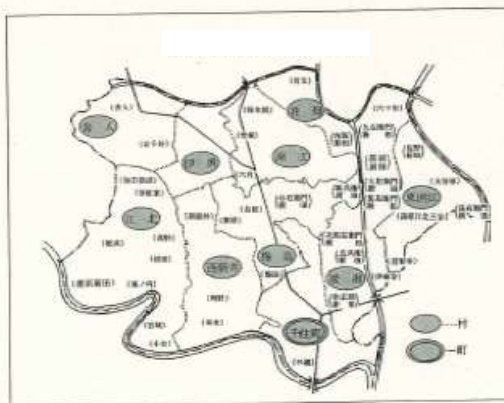
1871(明治4)年に廃藩置県が実施されると、小菅県は廃止・分割され、東京府・千葉県・埼玉県に所属するようになりました。現在の足立区は東京府に移され、東京府下第五大区の17小区、18小区、19小区とよばれました。

1878(明治11)年に郡区町村編制法がしかれ大小区が廃止されると、東京府は新たに15の区と6つの郡を置きました。現在の足立区は47カ町村で編成された南足立郡に入り、郡役所が千住町に置かれました。



小菅県の範囲

1889(明治22)年に市町村制が実施されると、町村の統合がおこなわれ、1891(明治24)年に南足立郡は1町9カ村となりました。



南足立郡と1町9カ村

### <産業>

明治・大正初期には、レンガ造りの建物は一種の流行となりました。良質な原料土にめぐまれ、製品の運搬に水運が使えた足立区の堀之内、小台大門、宮城、本木等は、レンガの供給地でした。また、日本製靴株式会社(リーガルコーポレーション)が1903(明治36)年に千住橋戸町に設立され、さらに1907(明治40)年、千住緑町に日本皮革株式会社(ニッピ)が創業されると、この付近に大小の製靴工場が群立し、都内一の靴生産地となり、併せて製靴工場も多く立地し、靴

の生産も盛んになりました。

### <交通>

明治になると人力車や馬車が登場し、陸上交通機関は一新されました。1872（明治5）年には千住—宇都宮間に乗合馬車が開通し、1890（明治23）年には千住から旧日光街道を埼玉県の草加・粕壁（現・春日部）を経て幸手町に至る区間で千住馬車鉄道が営業を始めました。

1896（明治29）年には日本鉄道株式会社土浦線が田端—土浦間（現・常磐線）に開通し、北千住駅が設置されました。

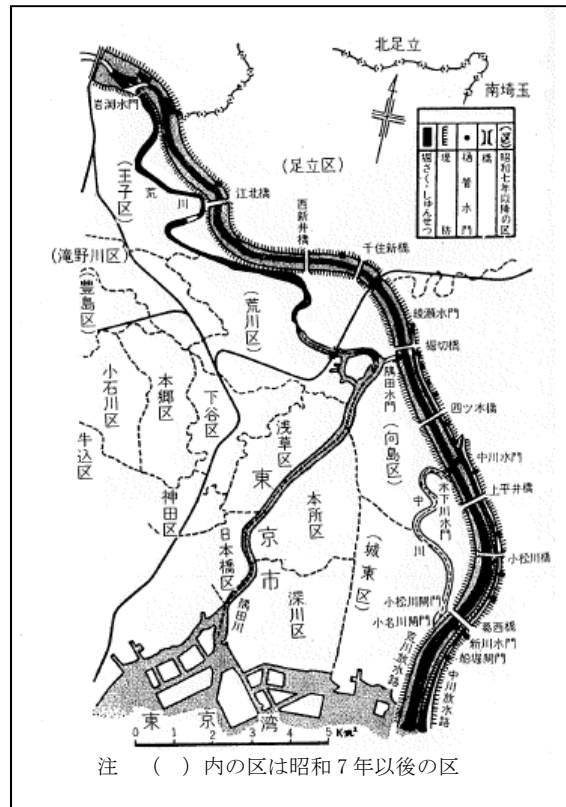
1899（明治32）年には東武鉄道によって北千住—久喜間が開通し、千住町はかつての宿場町のように交通の要所となりました。

### <荒川放水路>

荒川は江戸時代から明治の末まで何回もの洪水をおこし、人々はそのたびに苦しめられました。特に1907（明治40）年に続く1910（明治43）年の大水害では、関東平野全域と東京市の下町をほとんど水浸しにしました。

翌年、政府は首都東京を水害から守るために「荒川治水法案」を国会で可決し、荒川放水路の掘削（荒川下流改修工事）を正式に決定しました。

この工事は「洪水時の水量の4分の3を流すために、埼玉県川口境から東京湾まで20余kmを450～580mの幅で掘削して新川をつくり、岩渕には水門を設けて荒川の水量を調節する」という土木工事の画期的大事業であり、ほぼ20年にわたる歳月と巨額の工費をもって、1930（昭和5）年に完了しました。



荒川下流改修工事

### ◆大正時代

1923（大正12）年9月1日の関東大震災では荒川があったため市内の類焼からまぬがれ、また広々とした田畑が多く、人家もまばらだったので東京の他の地域から比べると損害は少なく、倒壊家屋をところどころ見る程度でした。

### <産業>

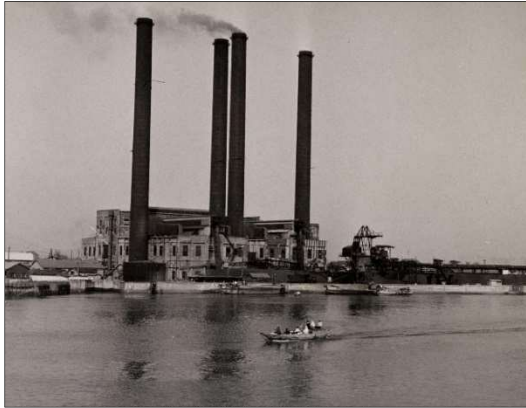
明治から大正にかけて荒川筋を中心として中川、綾瀬川筋に工場を持ったレンガ産業は足立区の主要産業であり、1916（大正5）年の「南足立郡誌」には都内屈指の工業地と記述がありました。しかし、関東大震災後は需要が止まり、次々に工場が閉鎖されていきました。

### <お化け煙突>

下町の人に親しまれ、映画「煙突の見える場所」で有名になった東京電力千住火力発電所の四本煙突は1926（大正15）年にでき、1963（昭和38）年までの間、

## ●足立区の沿革

稼働していました。東京電灯会社（現・東京電力株式会社）が、ボイラー用の煙突として建てたもので 75,000kw の発電量をもつ、当時日本最大の火力発電所でした。



お化け煙突(1954年撮影足立区立郷土博物館提供)

### <公営住宅>

関東大震災後に住民の福祉に役立つのがねらいで大正末期に足立区初の公営住宅（千住町営住宅）が千住大川町、千住末広町の両町に約 60 戸建設されました。住宅建設用地は、一面水田や池だった所を埋め立てて造成しました。その場所は、今では想像もできないほど静かなところで、周囲は人家もまれで南足立郡立伝染病院が人里離れてものさびしく建っていましたが、周辺に人家が相次いで建設されたため同病院は廃止されました。現在、じゃぶじゃぶ池をはじめ、児童の遊び場のある千住公園（大川町公園）として区民の憩いの場となっています。

## 現代(昭和・平成・令和時代)

### ◆昭和時代

関東大震災をきっかけに、市内からの移住者が多くなり、会社や工場もでき始め、南足立郡の人口は急増しました。1932（昭和 7）年、東京市は市域を拡大することになり、南足立郡 10 ヲ町村（千住町、西新井町、江北村、舎人村、梅島

町、綾瀬村、東淵江村、花畑村、淵江村、伊興村）を 1 区として「東京市足立区」が初めて誕生しました。また、1943（昭和 18）年には都制がしかれ、東京府は東京都となり、東京都足立区となりました。

昭和 30 年代からの高度成長期に入ると、人口増加にともなう学校、道路、橋梁、鉄道路線、上・下水道など社会的な基盤の整備が進み、同時に進行する大規模な区画整理や集合住宅の建築はそれまでの水田や畑の広がる農村的風景を大きく変えていきました。都営住宅をはじめとする住宅団地もこの頃から形成され、区内には 30,000 戸を超える公営住宅（23 区内の約 2 割を占める住宅戸数）が確保されました。こうして、江戸時代から続いた近郊農村の面影をもつ足立区が短期間に変貌を遂げていきました。

昭和も終わりごろになると、区最初の市街地再開発事業として昭和 62 年 3 月に綾瀬一丁目地区が完成しました。再開発ビル「綾瀬プルミエ」を契機に、都市住宅の供給、商業機能の活性化に寄与しています。さらに、敷地内にコミュニティ広場とお祭り広場を設けることで、地域コミュニティ機能の向上、周辺地区の整備もかねた事業が展開されました。

### <工業>

1937（昭和 12）年の日中戦争勃発を契機とする軍需産業の異状な発展で、近代的な大工場が足立区内に進出してきました。その主なものは製鉄工場、戦車製造などの重車両工場、精密工場、化学薬品工場でした。それらの多くは隅田川、中川、綾瀬川、荒川の沿岸に建てられましたが、これもまた重量運搬に舟運が使われたためでした。

### <鉄道>

区内の鉄道は、常磐線、東武鉄道に次いで京成電鉄が 1933（昭和 8）年に開通しました。その後、1962（昭和 37）年に

地下鉄日比谷線（北千住—人形町間）が開通し、1964（昭和39）年には全線開通となりました。また、1969（昭和44）年に地下鉄千代田線（北千住—大手町間）が開通し、1978（昭和53）年には全線開通となりました。

### <都電>

1903（明治36）年、東京に市電（1943（昭和18）年の都制の施行で都電となります。）が走り、区内では1928（昭和3）年、鉄製に架け替えられた千住大橋を通り日光街道（千住本町通り）の西側、見渡す限りの田園の中に国道4号線がつけられ、それに沿って千住新橋（現：千住四丁目）まで市電北千住線が延伸しました。

市電の開通により交通の主要路であった旧日光街道は商業地区に移り、隣接町村は都心部との関連からしだいに住宅地としての性格をもつようになり、昼・夜人口に差を生じ生活様式にも大きな変化があらわれました。しかしながら、昭和30年代から急激に増加した自動車交通におされて都電は1968（昭和43）年に廃止となりました。



廃止当日の都電「千住四丁目」停留所  
（1968年2月24日撮影足立区立郷土博物館提供）

### <区画整理>

1936（昭和11）年に千住関屋町で初めて土地区画整理事業が始められました。翌年には、梅島、南宮城町、新田の三組合が設立されましたが第二次世界大戦で中断しました。戦後は区内各地で活発

にこの事業が取り入れられ、令和5年4月現在、44地区（約2,230.18ha）で事業が完了し（清算中の2地区を含む）、2地区（約70.3ha）の事業が施行中です。（P31を参照）

足立区内は主に環状七号線の外側は区画整理によって市街地が形成されてきましたが、千住地域では千住宿開設以来、交通・商業の要衝として早くから市街地が形成された地区では、道路や公園などの都市基盤の整備が十分ではありません。



1958年（昭和33年）の花畑  
区画整理する前の様子



1969年（昭和44年）の花畑  
区画整理した後の様子



2023年（令和5年）の花畑  
文教大学開学後の様子

## ●足立区の沿革

### ◆平成時代

1990（平成2）年に、綾瀬の東京武道館が開館しました。この頃からバブル景気が崩壊し、不況が始まりましたが、足立区は低成長期の中でも公共事業を進めてきました。1996（平成8）年には足立区コミュニティバス「はるかぜ」（令和5年現在、12路線運行）が開通し、2000（平成12）年には「学びピア」（北千住）がオープン、2002（平成14）年には「五色桜大橋」が開通、2004（平成16）年には「シアター1010」（北千住）がオープン、2005（平成17）年には、首都圏新都市鉄道「つくばエクスプレス」が開通しました。

2007（平成19）年に東京未来大学が開学し、さらに2010（平成22）年に帝京科学大学、2012（平成24）年に東京電機大学が開学し、千住地区への大学開設が続きました。また、2008（平成20）年には、新都市交通：日暮里・舎人ライナーが開通しています。



日暮里・舎人ライナー

### <市街地のまちづくり>

北千住駅西口地区では、再開発ビル「千住ミルデイス」が2004（平成16）年2月に完成し、商業の拠点、文化の拠点としてにぎわいをもたらしています。また、竹ノ塚駅西口南地区では、再開発ビル「エミエルタワー竹の塚」が2005（平成17）年3月に完成し、竹の塚地区の新しいランドマークとして区民に愛されています。

さらに、北千住駅東口は社宅跡地への

東京電機大学の開学や交通広場の整備により、まちが大きく生まれ変わりました。



北千住駅西口

### <密集市街地のまちづくり>

防災面では、環状七号線以南に広がる密集市街地において、住宅市街地総合整備事業（密集住宅市街地整備型）を導入し、道路拡幅や公園等の公共施設整備、木造等老朽住宅の買収除却等により、災害に強いまちづくりを進めてきました。

このうち、関原一丁目では防災街区整備事業による共同化も実施されました。また、各事業地区ではまちづくり協議会を設立し、地域住民と区の協働による事業を展開しています。

### ◆令和時代

平成より行ってきた大学誘致により、2021（令和3）年には花畑エリアに、文教大学東京あだちキャンパスが開校、2022（令和4）年には江北エリアに、東京女子医科大学附属足立医療センターが移転開院し、2023（令和5）年現在、6つの大学が足立区に進出しています。



文教大学東京あだちキャンパス



東京女子医科大学付属足立医療センター

### <エリアデザイン計画>

足立区独自の新しいまちづくりの取り組みとして「エリアデザイン計画」の策定を進めています。エリアデザインとは、まちの特徴・魅力や求めるべき将来像などを区内外に広く発信することで、足立区のイメージアップや、地域の活性化を図るものであり、「綾瀬・北綾瀬」、「六町」、「江北」、「花畑」、「千住」、「西新井・梅島」、「竹の塚」の7つのエリアが対象となっています。今後は、「千住」、「竹の塚」エリアの計画の検討を行います。

### <駅周辺開発>

東京メトロ千代田線「北綾瀬駅」では、平成31年3月16日より代々木上原方面への直通運転が開始されました。2019（令和元）年には「北綾瀬駅周辺地区まちづくり構想」を策定し、駅周辺整備を進めており、2020年（令和2）年には「しょうぶ沼公園」の改修が完了しました。さらに、駅北口には交通広場、駅直結の商業施設の整備を進めています。

西新井駅西口周辺地区では、2020年（令和2）年に策定した「西新井・梅島エリアデザイン計画」に基づき、交通広場の整備や、道路整備、土地利用の見直し等が行われています。

また、2011（平成23）年に開始された竹ノ塚駅付近連続立体交差事業は2022（令和4）年に鉄道高架化が完了し、踏切が2つ解消されました。



事業着手前の赤山街道付近



事業完了後の赤山街道付近

### <防災まちづくり>

千住西地区では、2019（令和元）年から千住西地区防災街区整備地区計画を定め密集事業を進めており、「災害に強く安全・安心で住み続けられるまち」を目指して、防災生活道路の拡幅整備やプチテラスの整備が始まっています。

近年、激甚化する台風や豪雨災害などによる被害は続いています。これらの被害を受け、足立区では想定浸水深を示す看板の設置や、避難所の見直し、高台まちづくりの検討なども行っています。

これまでに発生した災害により浮き彫りとなった新たな課題を踏まえ、「災害に対して強靱なまち」を目指して整備を進めています。